

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2022年7月15日

You may say I'm a dreamer

6月21日（火）、NHKクローズアップ現代で、ミュージシャンでサザンオールスターズのボーカルをつとめる桑田佳祐さんの独占インタビューが放送されました。サザンオールスターズは、まさに筆者世代が青春をすごした時代のカリスマ的ロックバンドです。

喫茶店の2階のボックス席で桑子アナウンサーによるインタビューが始まりました。白いシャツに黒い革ジャンを羽織り、時折ギターを弾き語りながらインタビューに応える桑田さんは66歳とは思えないほど若々しく、筆者は「いや～やっぱ桑田は、ほんまカッコええわ～」となぜか関西弁で感動しつつ観ていました。

今回、クロ現が桑田さんの特集したのは、桑田さんが5月に、世良公則さん、佐野元春さん、Charさん、野口五郎さんら同年齢のミュージシャンと『時代遅れの Rock'n'Roll Band』という楽曲を発表したことによります。「平和」、「No more No War」などストリートにメッセージを伝える歌詞について、「コロナのこととか、ウクライナのこととか、安全保障に関する危機感が高まっている」「音楽人として意思表示しなければならない、と感じた」と桑田さんは話していました。

また、番組の中では、ボンジョビ、U2、マドンナなど世界を代表するロックスターたちが、ロシアのウクライナ侵攻に抗議し、ウクライナを支援する活動をおこなっていることが紹介されていました。

音楽には社会を変える力があります。番組でも紹介されていましたが、1960年代、ボブ・ディランの『風に吹かれて』などのフォークソングは、ベトナム戦争に対する反戦のムーブメントを生み出し、戦争終結に大きな影響を与えたと言われています。

テレビを観ながら、筆者はふとジョン・レノンの『イマジン (Imagine)』を思い浮かべていました。ずいぶん久しぶりにイマジンを聞いてみました。

イマジンは、1971年、ビートルズが解散した後のソロ時代のジョン・レノンによって誕生し、歌われた曲です。当時のジョンは、ベトナム戦争の反戦運動のさなかにいました。その歌は、天国も地獄も、国境もない世界で、人々が殺し合いをやめ、ともに平和に暮らす様子を想像してごらん、と呼びかけています。

ロシアによるウクライナ侵攻は、世界の安全保障に対する考え方、枠組みを変えました。フィンランド、スウェーデンがNATO加盟を表明し、日本でも、もしも日本が他国から武力侵攻を受けたら、という議論が高まりを見せています。先日おこなわれた参議院選挙でも、防衛費の引き上げや安全保障政策が大きな争点となりました。政治に国民の生命や

財産を守る義務がある以上、それは当然のことです。

その中には、急速な軍備拡張が将来の有事につながることを危惧(きぐ)する声があり、またそうした意見を現実を無視した空想主義だと批判する意見も存在します。

イマジンの中に「You may say I'm a dreamer / But I'm not the only one (君は僕を夢想家だと言うかもしれない/しかし僕一人ではないはずだ)」という歌詞があります。米ソが冷戦をくりひろげた泥沼のベトナム戦争の時代、敵対する人々が手を取り合っただけでなく、平和に暮らす世界など、まさしく「dream」に過ぎなかったことでしょう。しかし、そのような時代だからこそ、平和をあきらめず理想を求めようとしたイマジンが多くの人々の心を揺さぶったのです。

1980年12月8日、ジョン・レノンが狂信的なファンによって銃で撃たれ、その生涯を閉じました。今、ジョンが生きていたらどんな歌を歌ったのだろう、と思います。

注) 米ソ・・・アメリカとソビエト連邦。ソビエト連邦が解体され、現在のロシアが誕生した。

「テストで100点取ったら賞金1万円システム」検証

先日、よ〜く冷えたスイカに塩をふって、カプッと一口がぶりついた瞬間にひらめきました。「そうだ、生徒がテストで100点を取ったら、ごほうびに1万円をあげる、というのはどうだろう?!」スイカとテストのあいだにどんな関係が?と聞かれても自分でも説明できませんが、とにかくそうだったのだからしかたありません。まるで天からのお告げのように“テストで100点取ったら賞金1万円システム”のアイデアが舞い降りてきました。

ここまで読んで、速攻で参考書を手にした生徒諸君もいるかもしれませんが、まあ落ち着いてください。新たなシステムを導入するにあたっては、まずはそのシステムが本当に有効かどうかの検証が必要です。“テストで100点取ったら賞金1万円システム”にはどんなメリットがあり、どんな効果をもたらすのかを考えてみましょう。

『それをお金で買いますか/市場主義の限界』(ハヤカワ文庫)の著者マイケル・サンデル教授は、アメリカのハーバード大学で政治哲学を教えています。その講義は学生たちに絶大な人気があり、授業の様子が番組となってテレビ放映されたほどです。日本でも2010年に『ハーバード白熱教室』と題してNHKEテレで放送され話題となりました。

サンデル氏は『それをお金で・・・』の中で、私たちはほぼすべてのものが市場価値で評価され、売買される時代に生きていると述べています。そして、市場主義があらゆる分野に拡大することの是非について問いかけています。2014年に刊行された本なので現在では少し異なる部分もあるかもしれませんが、本の中には、市場主義が社会の隅々まで影

響をおよぼしていることを示す例が多数あげられています。例えば、刑務所の囚人が自分の独房を清潔で静かな独房に格上げする値段：一晩82ドル、絶滅危惧種であるクロサイを狩猟で撃ち殺す権利：15万ドル、1トンの二酸化炭素を大気中に排出する権利：13ユーロ、製薬会社の安全性臨床試験で人間モルモットとなる報酬：7500ドル、肥満体の人が4ヶ月で約6キログラム痩せた場合に企業や医療保険業者からもらえる報酬：378ドル、など「そんなものにまで値段が？」と驚く話がたくさん紹介されていました。

その一つに、イスラエルのある保育園の話がありました。その保育園では、子どもを迎えに来る親の遅刻が問題になっていました。保育園としては「子どもを預かる時間は〇〇時まで」という取り決めをしているのですが、遅れてしまう親がいるのです。そうした場合、親が迎えにくるまで保育士の一人が子どもと一緒に居残らなければなりません。そこで保育園はこの問題の解決のため、迎えが遅れた親に罰金を科すこととしました。これで果たして親の遅刻問題は解消されたのでしょうか？

結果は逆でした。保育園の予想に反して、親が遅れてくるケースが増えてしまったのです。

このような逆転現象が起こったのはなぜでしょうか？保育園は、罰金が親の遅刻を防止するインセンティブ（報酬、ある行動につながる動機）となると考えていました。「罰金をとられるのはいやだ（＝インセンティブ）、だから迎えに遅れないようにしましょう」と親たちが反応すると思ったのです。ところが親たちは、「お金を払えば遅刻が許される。時間までに子どもを迎えに行くのが無理な場合は、後でお金を払えばいい」と受け止めました。以前であれば、親たちは遅刻をすることに後ろめたさを感じていました。保育士に迷惑をかけることになるからです。ところが罰金を支払うことで、「遅刻」はお金で買えるサービスとなったのです。

サンデル氏はこのケースを「市場的なインセンティブ」が「非市場的インセンティブ」を破壊し、締め出した例だ、と説明しています。「市場」とはあらゆるものを金銭で売買することが可能な場です。

罰金が科せられる前、親の迎えが遅れた子どもに保育士が付き添うことは純粋な善意による行為でした。親たちからすれば、その善意（＝道徳的判断）に感謝し、遅れたことを申し訳なく思う気持ちが生じていたわけです。ところが遅刻に罰金が科せられることで、善意という非市場的分野に市場的インセンティブが介入してきました。迎えの遅れに値段をつけたせいで「子どもへの付き添い」は商品化され、道徳的価値は失われてしまいました。規範が変更されてしまったのです。

経済学には「人々はインセンティブに反応する」という重要な原理があります。同じボールペンが普通の商店では150円なのに対して、百円均一のお店では100円で売られているとしたら、後者を選択する人が多いでしょう。レストランを利用するとき、一方の店はポイントが付与されず、もう一方の店はポイントをためると無料食事券をくれるとしたら、後者の店の方が集客力は高くなるはずですが。

しかしサンデル氏は、私たちの暮らす社会には市場的なインセンティブがふさわしい場

面とそうでない場面があるといいます。そして、そうでない場面に無制限に市場的インセンティブが持ち込まれることで、人間の尊厳や社会正義などの道徳的価値が損なわれかねないことに警鐘を鳴らしています。

『それをお金で・・・』の中からもう一つ興味深い事例を紹介しましょう。

原子力発電など核エネルギーへの依存度の高いスイスでは、長年にわたり核廃棄物の貯蔵場所について検討がなされていました。そして、スイス中央部のヴォルフエンシーセンという山村がその候補地となり、この問題の賛否を問う住民投票が行われることになりました。この住民投票の直前に、数名の経済学者が村民に調査を実施し、政府がこの村に核廃棄物処理場を建設するとしたら賛成するかどうか質問しました。すると、“施設は地元には押しつけられるお荷物だ”という見方が広がっていたにもかかわらず、過半数をぎりぎり超える51%の住民が受け入れに賛成する、と回答したのです。

次に経済学者たちは、村が施設の建設を受け入れた場合、政府が村民一人ひとりに毎年補償金を支払うことを申し出たとしたら賛成するかを質問しました。ふつうに考えれば補償金というインセンティブが加わることで、より賛成票が増えることが予想されます。しかし、これも結果は反対でした。受け入れに賛成すると回答した割合は、51%から25%に半減してしまったのです。

サンデル氏はこれを、核廃棄物処理施設を受け入れるという公共心（＝道徳的判断）が金銭の提供（＝市場主義）により損なわれてしまったためだ、と考えています。施設受け入れに賛成した多くの村人にとって、その意志は、「スイスは核エネルギーに依存しているのだから、核廃棄物はどこかの地域が受け入れるしかない」という認識、いわば公共心を反映するものでした。事実、金銭の申し出を拒否した村人たちは、反対する理由として「自分たちは賄賂（わいろ）に動かされたりはしない」と語ったといいます。施設の受け入れに金銭提供が見込まれることで、市民としての社会貢献の問題が金銭的な利害の問題に変質してしまったのです。

サンデル氏は、『それをお金で・・・』の最後を「つまり、結局のところ市場の問題は、実はほかの人々とともにどう生きることを望むかという問題なのだ。われわれが望むのは、何でも売り物にされる社会だろうか。それとも、市場では評価されずお金では買えない道徳的・市民善というものがあるのだろうか」と締めくくっています。

18世紀半ばにイギリスで起こった産業革命に端を発し、資本主義は急速に拡大してきました。資本主義は世界を牽引する原理、エネルギーとなり、現在も膨張を続けています。一方で行き過ぎた資本主義、市場主義は、格差や貧困、エネルギー問題、気候変動問題など様々な課題を生み出していることも事実です。

現代社会の一員として生きるうえで、お金で売買できるものは何か、できないものは何か、できないものをお金で売買しようとしたときにどんな影響が生じてくるのか、私たち一人ひとりに問いが投げかけられています。

さて、問題の“テストで100点取ったら賞金1万円システム”ですが、サンデル氏の考え方にもとづいて検証してみましょう。

テストで100点を取ることにに対して設定された賞金はインセンティブです。生徒はインセンティブに後押しされて一生懸命勉強し、学力を向上させるかもしれません。これは生徒にとっての利益となります。また、生徒が一生懸命勉強して学力があがった結果、学校の評判もよくなるかもしれません。これは学校にとっての利益です。一見すると“テストで100点取ったら賞金1万円システム”は、生徒、学校の双方に利益をもたらす、誰にも損失は与えていないように見えます。

しかし、影響はそれだけでしょうか。賞金システムの中では、生徒にとって勉強することは、賞金を得るための手段となってしまいます。勉強することの意味が変質し、学ぶ楽しさや、学ぶことで自分を成長させようという気持ちが失われるおそれがあります。もしも賞金というインセンティブが生じない場面では、生徒たちは勉強することの目的を見失ってしまうかもしれません。悪くすると、賞金目当てにカンニングが横行するようになる可能性もあります。テストの点数に市場主義を持ち込むことは、どうやら生徒にとってプラスの側面ばかりではなさそうです。

学校の場合はどうでしょう。学校教育の役割は、学問的教養や人間性の育成をつうじて、真理を愛し、すぐれた知性を有し、市民的な美德を体現できる人物を社会に送り出すことです。そこには市場主義とは一線を画した理念や理想が存在すべきです。テストの点数をお金で評価することは、教育という非市場的分野に市場主義を持ち込むこととなり、教育の腐敗、墮落をまねきかねません。結果として学校は社会的信頼を失い、存在意義を揺るがすこととなります。賞金システムは学校にとっても負の影響をおよぼす可能性が大きいのです。

ここまで読んで、賢明な生徒諸君はもう予測がつかしましたね。上記の検証にもとづき、せっかく思いついたアイデアではありますが、“テストで100点取ったら賞金1万円システム”は撤回することとします。皆さん、異存はありませんね？

君たちを学びに向かわせるインセンティブにはどんなものがあるのでしょうか。テストでいい点数をとりたい、先生や親にほめられたい（認めてもらいたい）、世間の評価の高い大学に進学したい、将来社会的地位の高い職業に就きたいなど、すべてが学ぶうえでのインセンティブになります。

入試や資格取得など、もちろん実利的な必要性から勉強をしなければならない場面も存在します。しかし、学びが、実利的な何かを得るための手段と化すことが無反省に助長（じょちょう）されるとしたら、学びの意味が変質し、本来あるべき学ぶことの楽しさ、学びによって得られる知的な喜びが損なわれるおそれがあります。

私たちの暮らす社会には、市場主義では評価できない、市場主義では評価すべきでない価値というものがまぎれもなく存在します。サンデル氏のことばを借りるなら、学びには「市場では評価されずお金では買えない」価値があるのです。